余命半年の患者をわずか3カ月の治療で救う
標準治療だけじゃない、様々な治療あるがんの統合医療

乳がんを患ってがん細胞が骨や肝臓など全身に転移し、余命半年と宣告された50代の女性が村上院長の治療を求めて医院を訪れた。

「出来ることは全てやってみようと思いました。まずたばこや酒類を完全にストップし、食生活も改善していただきました」

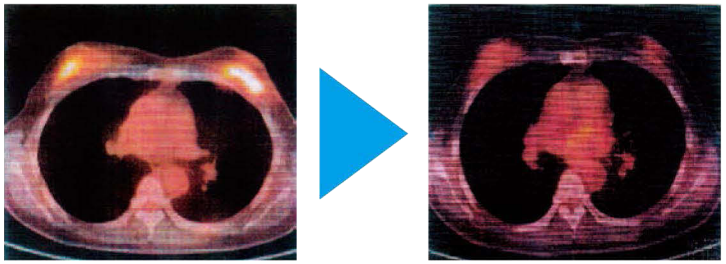
村上院長はこうして患者の生活習慣を改善し、その後、超高濃度ビタミンC点滴を開始した。

「がん細胞が死滅するといわれるビタミンCの血中濃度が400mg／dℓまで上がりました。この時、〝もしかしたらがんが治るかもしれない〟と思いましたね」

村上院長が治療を始めて3カ月後に検査を行った結果、全身に転移していたがん細胞が見事に消えていた。

「自分でもびっくりしました。免疫力と抗酸化の力、それにビタミンCの力を再確認した瞬間でした。自分のやってきたことが間違っていなかったんだとつくづく思いました」

この50代の女性患者のように、病院で余命が幾ばくもないと告知され、〝もう治療をあきらめなさい〟と言われるがん患者は世の中には大勢いる。さらに抗がん剤の副作用が強すぎて治療を続ける体力がない患者も多い。



治療前（左）とがんが消失した治療後（右）

それでも患者の多くは〝治療を諦めたくない！がんを克服したい！〟と切望しているのだ。

「病院で行われるがんの標準治療（手術、抗がん剤、放射線）はもちろん重要ですが、これがん治療の全てではないということを患者さんに知って頂きたい」と村上院長は声高に訴える。

がん患者の中には同じ治療を受けても、治りの早い人、遅い人の差がはっきりあらわれることが多い。この差というのが「免疫力と抗酸化力がその患者さんにどれだけ備わっているかの差なんです」と村上医師は解説する。

「今の日本のがん治療はこの2つがまだまだ重要視されていないのが現状です。病院で行われる標準治療では全く考慮の対象とはなっていません。だからこそがんの統合医療をもっと普及させていかなければなりません」と力を込める。

統合医療の一つである補完・代替医療には食事療法やサプリメント、運動、温熱（温泉・入浴）など様々なものがある。「これらは全て免疫力と抗酸化力を高めることが目的で、最終的ながん治療の落ち着き先はやはりこの2つなんです」と語る。

精神的ケアもがん治療の重要な要素
最良の治療法は幸せホルモンを生み出す〝笑顔〟

がんに罹る人の8～9割が抱えているといわれるのが精神的ストレスだ。「がんを発症した頃を振り返ると、離婚や家庭内のトラブルなど、大きなショックを受けるような出来事があったと指摘する患者さんが大勢います。ストレスのために活性酸素が急激に上がり、がん発症の原因になってしまうのです」